

## 世紀末の青い星

——ソール・ペロー「サムラー氏の惑星」——

新 美 澄 子

1

事實は小説より奇なりといったのは十九世紀の詩人だったが、今世紀ほどその言葉が真実に響いた時代はかつてなかった。物事は単独で生起することはなく、すべての事がさまざまな要因と深く結びあっていることを今ほど強く意識させられたことはない。われわれの時代は、単純なことを決断するにも、多くの条件を考慮に入れなければならない。世紀末を迎えて、激動する世界情勢の分析や、背後にある不可解な潮流の正体をつきとめる作業は、今後ますます重要になっていくに違いない。

ソール・ペローの七番目の長編『サムラー氏の惑星』は、世界がこれほど劇的に変化するとはまだ誰も予測しえなかった六十年代に、きたるべき世紀末の地球の運命を予想して書かれた力作であった。六十年代も動乱の時代だったが、その背景には、科学的な世界観が近代の宿痾の原因であるという認識があった。ペローはわれわれの属している時代に敏感に反応する、すこぶる微妙でデリケートな感受性と頭脳の持ち主である。デビュー時のひたすら自己の内

部に沈潜するタイプから、世界内存在としての自己という広いテーマを追究する作家へ変身したのは、六十年代の政治的、社会的、文化的動乱があった。ペローは、当時のニューヨーク知識人の一人として、六十年代の大動乱に真っ向から直面したのである。

『サムラー氏の惑星』の主人公アーター・サムラーは七十二歳、ポーランド生まれのユダヤ人である。成長してから英国に渡り、ロンドンで二十年近く滞在した。その間、その地の知識人たちとも親しく交わる機会に恵まれたが、第二次大戦が始まると同時に、ユダヤ人の彼は家族とともにヨーロッパ各地で死線をさまようことになる。ナチスに片目と妻を奪われた彼は、終戦後ひとり娘のシューラとともにアメリカへ移民した。

物語の始まる六十年後半の現在、彼はマンハッタンのアパートに姪と住んでいる。六十年代のアメリカは、ベトナム戦争による時代不安をもっとも身近に感じとったベビーブーム世代が中心的な活躍をした時代だった。ドラッグや性解放文化の洗礼も進み、のちに対抗文化と総称されるメディアと表現にかかわる意識革命が進行していた。

サムラーの住むニューヨークには、氣狂いじみたことに熱中する人間たちのエネルギーが充満している。ファッションから建築様式、出版、美術界にいたるまで、あらゆる分野で急テンポに移り変わる変化が追い求められていた。この都会にいる限り、いかなる新奇な試みもわずか数日で目新しさを失い、前衛芸術の大胆な実験、状況劇場など、さまざまな形で改革が行われた。

二十世紀は「ファウスト的野望」<sup>②</sup>によって導かれた世紀である。この衝動はさまざまな発明、発見、イノベーションを誘発する主要な原動力となった。科学技術の進歩はめざましく、コンピュータ産業はもちろん、テクノポリス、光ファイバー、遺伝子組み替えなど、われわれの日常生活を大きく変革する発見、発明が、日進月歩の勢いで行われ

ている。自然界においても都市化が進むにつれて、かつては天然の生物の宝庫だった広大な野生の土地が公園に、動物園に、万国博覧会場へと変化した。

現代は能力の多様な発揮を要求する時代である。われわれはさまざまな分野の期待からくる重圧に押しひしがれて、いるといっても過言ではない。酒と煙草を同時にやりながら音楽に耳を傾け、数人と性的交渉を持つあいだも、つぎと送られてくる記号を解読するという離れ技を強いられる。人間の能力にたいする過剰な期待が現代人の負担になって、いることは確かだ、われわれは知らないことへの恐怖から神経症にかかっている。たまさか人間の持つ偉大な潜在能力について聞かされても信じられず、むしろ個人が持つて生まれた能力は、ますます低下してゆくような気がしてならない。

バスの停留所に向かう途中、ブロードウェイで目にするもの。あらゆるタイプの人間の複製。赤色人かフィージー島人と思われる野蠻人、しゃれ者、野牛ハンター、命知らずのならず者、同性愛者、性的夢想家、女性的な男、男性的な女、王女、詩人、画家、探鉱者、吟遊詩人、ゲリラ、チェ・ゲバラ、新時代のトーマス・ア・ベケット。<sup>(3)</sup>

ブロードウェイの交差点で、サムラーはあらゆるタイプの人間とすれちがう。そこには誇大妄想の野蠻人もいれば、攻撃性むきだしの危険人物もいた。狂信的な宣教師、同性愛者、俳優志願の若者達。性的妄想にとりつかれた連中ならはいて捨てるほどいる。ありとあらゆるタイプの個人が多彩な様式を取り入れながら自己の独創性を主張しつつ闊歩しているのを見て、サムラーはある感慨にうたれる。それは、名もない群衆の一人一人が形而上学的な存在であり、

複雑な現実の解釈を身をもって生きぬいているという実感であった。大都会に住む彼らはつねに何かに飢え、せきたてられているように見える。血氣盛んな若い世代は異様なことに情熱を燃やし、年配者は知的な活動を求めている。しかし、どちらにしても、もうこれで十分という満足感や満ち足りた安らぎは感じられなかった。

しかし、マンハッタン人の狂乱ぶりとは対照的に、サムラー老人の日常は平穩で、むしろ單調そのものといつてよかった。彼は英國流の規律ある落ち着いた生活を好んだ。長年英國で暮らしたことのあるサムラーは、マンハッタンに住みながら、まるで異邦人のように地味で抑制のきいた生活態度を貫いている。騒いでいるのはいつも周囲で、サムラーのほうはどうにも腹の立つようなことがあっても、取り乱したりせず冷静だった。彼はいつも他人の境界線を踏み超えない生き方を心がけている。現役を引退した彼がアパートを出るのは、図書館に行くときとか、入院中の親戚を見舞うときに限られていた。

こうした性格について、サムラーが周囲に対して冷やかかで、優越的な態度をとっているという批評がある。彼は時代にきわめて敏感な反射鏡<sup>①</sup>なのだが、積極的に外界を変革しようとはせず、あくまでも冷静な反射鏡にとどまり続けている。

ブロードウェイを歩く彼は大英博物館で読書をしている人間のような顔つきをしている。ブロードウェイはつねにサムラーに挑戦をつきつけた。もともと彼は、一度もその挑戦に応じたことはなかったが、ニューヨークという都会はつねに何かを声明しているように思える。あらゆる頭脳、あらゆる運動が合流することによって、この街の群衆は何かを訴えようとしていた。

車が流れるように続き、風と、マンハッタンにしては珍しく輝くような陽光も流れていた。風と光が一つになつて、まるでヘンリー・ムーアの彫像のように、いくつもの穴やくぼみのあるサムラーの体を通り抜けてゆく。

これは、コロンビア大学での講演を反体制学生にめっちゃめっちゃにされ、聴衆の面前で罵倒されたショッキングな出来事のすぐあとでマンハッタンを歩く彼の姿である。彼の体は、「まるでヘンリー・ムーアの彫刻でもあるかのよう」に、穴やくぼみだらけ<sup>⑤</sup>だった。その空隙だらけの体を、マンハッタンの陽光と風が吹き抜けていく。大都会の孤独がさりげなく、じつに印象的に描かれている。

ふんわりと盛り上がったアスファルトのおなかには湯気を出している下水溝のへそが見える。疵だらけの舗道にかためて置いてあるゴミの容器。褐色の砂岩。サムラーのアパートと同じエレベーター<sup>⑥</sup>つきの黄色の煉瓦のビル。小枝のように突き出しているアンテナの林は、アパートに閉じこもっている人々に兄弟愛を伝えている。空中からさまざまなイメージを引きこむ、鞭のようにしなやかでスリリングな金属の枝状突起<sup>⑦</sup>。

ある早朝、サムラーは天啓を受けた。薄明のマンハッタンから現代の情勢を要約して、人類の未来を占うべきであると。アウシュヴィッツの地獄から生還したサムラーには、戦争を生みだす文明や社会機構を（直観と分析によって）告発する責任があった。彼は、殺されてよみがえり、運命の神にいまいちど行列の最後にならばされた、現代のラザロであった。巨大都市ニューヨークは、文明の崩壊を、現代のソドムとゴモラを連想させた。文明の自殺的衝動が進行しているという噂はどうやら本当らしい。この終末都市に見られるさまざまな前兆のなかに歴史的必然を探しだし、地球の未来を占うとしたらどういうことになるだろう。

月着陸のニュースに狂喜したアメリカ国民のフィーバー<sup>⑧</sup>は、一つのことを暗示していた。それは二十一世紀が目指すポスト産業社会が、これまで以上に時間と空間の軸が短縮された、恐るべき即戦即決の情報化時代になるということである。そのきざしはすでに六十年の初めには現れ始めていた。現代人の頭脳は、さまざまな部門から送られ

てくる情報を、海綿のように吸収しては吐き出している。月面の遊泳者、テレビのなかの戦場、宇宙中継される外国での核実験のニュース。そのほか情報の波が運んでくるものは残さず取り入れ、消化しなければならぬ。コンピュータに代行させても処理しきれぬ情報のために、われわれの神経は世界の重みに圧倒されかけて「もうたくさんだ」と叫んでいるのに……。

六十年代の特徴の一つに対抗文化（カウンター・カルチャー）の登場があった。対抗文化の戦略は、体制そのものを否定するのではなく、自由なメディアをあらゆる文化領域にはりめぐらして、文化価値をいつのまにか大きく変様させてしまう情報神経戦であった。

そして新しい文化創造としてのカウンター・カルチャーとはほぼ同時期に登場したが、六十年代の性の解放運動である。<sup>3</sup>たとえばサムラーの遠戚で富豪の娘のアンゼラは、性の解放を身をもって実践する一人だが、彼女の属する富裕階級の奔放な性は、私有財産の権利や洗練された科学技術など、文明のつくりだした秩序や機構に保護されることによってはじめて特権を得たのである。六十年代の文化は、文明の生みだすさまざまな富と財と機会を積極的に受容し、利用することによって豊かになった。過激に体制を批判するロック・ミュージシャンですら、文明の提供する電子装置や道具を利用することにおいては、いささかのためらいもなかった。彼らにとって文明の所産は不可欠だったのである。ロマン主義文学や神秘主義の流行、音楽や映像文化の大量流通による貢献も大きかった。そのほか性の解放に拍車をかけたものに、LSDやマリファナといった幻覚剤の流行がある。サイケデリックなヴィジョンの拡大によって新しい聖性を獲得しようとする若者の反乱は、いっそう運動をエスカレートさせていった。

加速度的な昂揚感を求めてやまない現代の性の解放が行きつくところは、あらゆるタブーの全廃ということになるだろう。六十年代においては、性的充足が個人性の独占的尺度になったとサムラーは嘆く。これまで忌まわしいこと

として回避されてきた行為が、人間の復讐を口実に公然と行われるようになるかもしれない。能力の衰えた現代人はあらゆる工夫に努力を惜しまないし、アンゼラやブルッフが追求するフェティシズム（小兒的多形倒錯）などですら、もはや病的とは見なさない。「人間に関わることに真に忌むべきものは何もない」ということを立証するためだけでも、ありとあらゆる事が行われるだろう。しかし、いったんタブーを破る方向に進めば、倒錯の度はとめどなく増し、性の目的であるエロティシズムは、エロスの域を超えてグロに変質するであろう。そうすれば、サムラーの危惧することく、人間の性はただひたすら「嫌悪感を克服するための共同の努力」へと墮してゆくに違いない。

ある日ブロードウェイを走るバスのなかで、サムラーは黒人のスリの犯行現場を目撃する（奇妙なことにサムラーはこのスリに好意を抱く）。下車して公衆電話から警察に通報しようとしたが、見つけた電話ボックスはいずれもぶちこわされ、通じなくなっていた。ボックス内は小用を足す場所に変わっていた。今や世界でも有数の、悪名高い犯罪都市と化したニューヨーク。たしかにニューヨークこそは文明と栄光と狂気の象徴だった。アパートに強盗に入られたサムラーの姪は、窓という窓に格子板をうちつけ、分厚いカーテンを引き、ドアには二重のロックを取りつけた。この都会に住む誰もが、安全は自分で確保しなければならないものと覚悟している。

サムラーの唯一の気晴らしである図書館通いも安全ではなくなってきた。裾幅の広いズボンをはき、頬ひげをのばした現代風の若者たちが、図書館に火をつけ始めたとき、サムラーは文明の荒廃がもはや治癒不可能なほどに進行していることを痛感する。折しも大学紛争たけなわの頃で、学問の聖域である大学が騒動の渦中にあった。生粋の犯罪者たちに加え、若者たちの暴動が人々をおびやかす、市内は騒然としていた。現実の社会システムの呪縛を拒否する若者たちは、いかに現実を自らの想定する社会へ変化させるかを考え始めていた。

二十五年前のある日、突然、サムラーは死の内側にいた。雲一つなくよく晴れた日だった。妻やほかの人々と一緒にまる裸にされ、全員がひとつの大きな墓穴のなかで射殺されることになった。その日にはサムラーはすでに銃の台尻で片方の目を殴られて、目がみえなくなっていた。裸にされたときには体が萎縮して、もうすでに死んでいるような気持ちにされた。

アイヒマンの証言。一度に大量の死者を埋めた真新しい墓穴の上を歩いたとき、鮮血が靴の下から滲み出てきて胸が悪くなり、一、二日寝こんでしまうほどだった。<sup>10</sup>

だがサムラーは、倒れた墓穴の中からいくつもの死体を押しつけ、土をひっかいては這い上がり、逃げ出すことに成功した。その後ザーモシュト森では、こんどはサムラーがドイツの落伍兵を射殺する番だった。「撃たないでくれ」と命乞いした兵士を、彼は奪った銃で射殺した。

昔から殺すことはエリートたちの特権だった。支配者たちは、殺人の能力によってエリートであることを立証しなければならなかった。歴史に残るほどの権力者たちはみな殺人の方法に精通している。民衆は自立した価値観を持たなかったがゆえに、殺人の能力を持った支配者たちの魅力に抗しきれなかったのである。サムラー自身も生命を奪うことがあった。彼はそれが快楽の一つであることも知っていた。万事が終わりとなる死を何より恐れる人間が、まるで肉体の自然な死だけでは不足とばかりに、互いに殺し合う。雪に埋もれた森の奥で敵を待ち伏せていたとき、

サムラーは、殺すことには快感が伴うことを確認した。

いったん戦争になれば、それまで禁じられていた行為が賞賛されるようになる。殺人者が敬意を持って迎え入れられ、掠奪や暴力も、もはや犯罪とはみなされない。銃の引き金を引いたとき、サムラーは相手にたいする憐れみを免除されていたのだ。しかし殺されかけ、のちに殺人を犯すという二つの体験は、三十年近くたった今も、悪夢のように、執拗に彼につきまとうた。

サムラーにとってすでにその男は死んでいた。彼の身につけている服は、もはや生活のためのものではなかった。彼はマークされていた。死ぬしかなかった。もう死んでいた。「殺さないでくれ。何でもやるから」サムラーは返事もしないで、手のとどかない所に突立った。「子供がいるんだ」。サムラーは引き金をひいた。すると相手の体は雪の中に横たわった。<sup>①</sup>

一九六七年の夏、アカバ危機<sup>②</sup>の開始と同時に、サムラーはイスラエルへ飛び立った。それまで同胞のユダヤ人問題に関心を抱いたことのないサムラーが、七十二歳という高齢をおしてジャーナリストの資格をとり、戦地へと赴いた動機は、もう一度ザーモシュト森を、より基本的な人間性を、ふり返って見たかったからだ。物事が現実そのものの、真実そのもののように見えたのは、どういう時だったかを再確認するために。

中東の砂漠のなかで白い月光を浴びながら、サムラーは一九三九年にあと戻りしていた。自ら死を覚悟したあの日を理解するために、六十七年の戦場におけるいかなる残忍な光景も、ひるまずに直視しようと心に誓った。だが、目隠しをされた敵の狙撃兵がトラックの床にころがされているのを見たとき、こみ上げてくる泣きたい思いを彼は必死でこらえなければならなかった。

殺人から呪いを消し去るには、殺人を平凡で退屈な事件のように思いこませるのが一番だ。<sup>13</sup>

戦場から帰ったサムラーは、人間が戦争をするのは、戦争が好きだからだと確信する。少数の権力者たちは殺人ごっこの特権を楽しみ、一般の大衆は彼らの権威に屈服することを望んでいるのだ。現代は大衆の役割が増大しつつあるといわれるが、大衆の啓蒙にはいつも危険な賭けが伴う。ベトナム戦争や湾岸危機の報道が明らかにしたことは、メディアの威力とその偏向であった。テレビは戦争を茶の間に届けるのには役立ったが、その画面が伝えた戦争のイメージは、現実の悲惨さからはほど遠いものだった。情報というものは、しばしば流通しやすいように規格化され、商品化される。国際政治の複雑な要因も、大衆が理解しやすいように単純化した図式に要約されてしまう。しかも不完全なメッセージしか与え得ないメディアの欠陥は、大衆の目からは巧みに隠されている。

### 3

一九六九年七月二十日、アメリカはついにアポロ計画を成功させた。六一年、世界で初めて有人宇宙飛行に成功したソ連のガガーリン少佐は、感想を求められて、「空はとても暗かったが、地球は青かった」と語った。彼が宇宙船から見た暗く広がる大宇宙はまだ多くの謎に包まれている。果てしない夜空のなかに青く光る一つの星、それが地球だ。「サムラーの惑星」とは広く解釈すれば、われわれの現在の唯一の生活の場である地球であるし、狭く解釈すれば、主人公と、彼をとりまく者たちが構成している生活環境のことであろう。それは、ハイパーリアルなシミュラクルとして、つねに憧れの対象となる、ニューヨークというメガロポリス（巨大都市）の空間である。

スプライ社のネオンサインからそう離れていない所に、交通信号のような丸い月が見えていた。その月のイメージというか残像が今もサムラーの眼底に残っていた。宇宙飛行士の撮った写真のおかげで、われわれは地球の美しさ、その白さと青、漂う雲におおわれた偉大な輝きを知っている。輝かしい惑星。しかし地球の上では、そこにとどまることを耐え難くするために、あらゆるものが無意識のうちに、狂気と毒をいっせいにまき散らしている。われわれを一気に消し去るために？ いっそ焦土素戦のほうが、ファウスト的野望よりもましかもしれないとサムラーは思った。

人工惑星やアポロの成功によって、アメリカ合衆国は、今やSF的娯楽の最大の配給国になりつつある。しかし、一方では、宇宙開発に伴うさまざまな危険や公害が報道されぬまま、業績の偉大さがかりが賞賛されているという批判もある。二十世紀はまた、二度の世界大戦をはじめとして戦争、内乱、テロリズム、肅正など、破壊的行為の発動が多い世紀でもあった。そして今、われわれは生命を生み出す大地を汚したツケを支払らわされている。グローバリゼーションが加速度的に進む二十一世紀は、「かけがえのない地球」を守るための「地球管理技術」がますます求められるだろう。

二度の大戦を通して世界の崩壊を目撃したサムラーは、ふたたびこの地球が、崩壊の危機に直面する可能性は十分あると考えていた。不安と退廃のうちにも新しい芸術に対する情熱を秘めていた十九世紀の世紀末は、ハイテクノロジーを生んだ二十世紀への跳躍台になった。ところが今、世紀末に立たされたわれわれが、来たるべき二十一世紀を予想してみても、ときめくような希望はほとんど感じられない。あるのは漠然とした終末の予感だけである。人類は終末の恐怖に酔いしれているとサムラーは思う。死を恐れる人類は、最後の審判の日までは狂気という逃げ口上があ

ると考えた。西欧の文明社会全体が、狂気という責任逃れの仮装を演じているのだ。だが、戦場から帰還したサムラーは、狂気という仮装の裏側にある人間の死に対する恐怖を見抜いていた。死の恐怖によって人類の無限を求める情熱がかき立てられたのである。ハイテクの粋を集めた宇宙への挑戦も、死によって限定された人類が、時間を克服できない代償として、空間を征服しようとしているにすぎない。サムラーは、ロマンチックな月世界への飛翔の背後にひそむ、ニヒルな終末論的絶望を察知していた。西欧の文明が世界全体に伝播したあとも存続しようという保証はどこにもない。この地球は、われわれの母体であるとともに、埋葬地でもある。

一つの惑星から別の惑星に向かって出発しようとする瞬間には、何かが終わりを告げているわけだから、幾つかの決定的な判断が、要約が、必要になってくる。そう考えたとき、サムラーの頭を終末の予感がよぎる。すべてのものが一斉に、しかもそれぞれ独自のやりかたで終極感を味わっているように、彼には思えるのだった。

やがてあらゆるものが変化するしかないのだ。今の太陽ではなく別の太陽に時間を合わせるようになるだろう。いや時間そのものが存在しなくなるかもしれない。不変なものがなくなるのだから、昼や夜は博物館におさめられ、地球は記念館に、回輻木馬の墓地に变化する。海は生物の骨を石英のようにまき散らし、われわれにとっての平和を永劫にわたってすり碎き、砂をつくる。<sup>115</sup>

サムラーがポーランドからロンドンへ、ロンドンからアウシュヴィッツへ、そして最後にはニューヨークへと、運命の糸に操られるように運ばれてきたのは、自己の体験の精髓を通して、物事の真実をつきとめることを使命と感じたからだ。ベロー自身も、自分の属する時代の、時代感を表現することを小説家の使命と信じている。あらゆる社会現象が人間性の消滅と個人の無名化の方向へ進んでいるように感じられる現代にあって、ベローは知識人の良心

において、そのような傾向に強い抵抗の姿勢を示す。急激に変化しつつあるアメリカの都市と、そこに住む人々の意識や生活の変化を記録することに彼が情熱を感じるのも、同時代人として何らかの提言をしたいからであろう。

ここ二十年間の生活環境の激変は意識の変化を生んだ。近代的な生活を成立させている枠組みそのものが、もう後戻りがきかない形で大きく変わりつつあることを、誰も否定できない。もはや私たちがこれまで使ってきた言葉では、今日の感性や欲望を表現しようとしても、びったりこなくなってしまう。そのもどかしさをもっとも痛切に感じているのは、ヘローのように、時代の変化に敏感な作家たちであろう。新しい事態をとらえるためには、新しい表現の方法、新しい言葉の創造が必要である。七十年に刊行された『サムラー氏の惑星』は、今から二十年も前に発表された作品とはとても思えないほど、今日的なテーマを豊富に盛り込んでおり、これからも刺激的なテクストとして存在し続けるに違いない。

# 注

- (1) Jane Howard, 'Mr. Bellow Considers his Planet', *Life*, 3 April 1970, p. 59.
- (2) Saul Bellow, *Mr. Sammler's Planet*, Viking, 1970, p. 135. 拙訳は48° 以下と同様。
- (3) *Ibid.* p. 147.
- (4) Jonathan Wilson, *On Bellow's Planet: Readings from the Dark Side*, Fairleigh University, 1985, p. 144. ヲローと親しかった友人ヘン・シーガルによれば、当時のヘローの思想とサムラーの発言の内容はほぼ一致するといふ。
- (5) Michael K. Glenday, *Saul Bellow and the Decline of Humanism*, Macmillan, 1980, p. 114.
- (6) Bellow, p. 43.
- (7) *Ibid.* p. 9.
- (8) Ellen Pifer, *Saul Bellow: Against the Grain*, University of Pennsylvania, 1990, p. 12.
- (9) Cf. Wilson, p. 151.

- (8) J. Bakker, *Fiction as Survival Strategy*, Rodopi, 1983, p. 146.  
 バッカーは「アメリカの民主主義が大衆に貴族の特権を与えた」とヘローがいう意味は、六十年代の性の解放のことをさしていると解釈している。
- (9) Wilson, p. 148. ウィルソンは、このスリはサムラーの分身 (Double) だという。
- (10) Bellow, p. 137.
- (11) Ibid. p. 139.
- (12) Glenday, p. 114. 中東のアカバ湾危機をとりあげたヘローが、当時米国民の最大の関心事だったヴェトナム戦争についてまったく触れていない(例えば徴兵忌避の問題)。この点で作品の評価が分かれたりしたが、それに関しては、ギャロウェイやグレンディの分析が参考になる。ゴールドマンは、処女作『宙ぶらりんの男』では主人公は戦争に無関心だったが、サムラーには明らかに成長が見られると評価している。
- Cf. L. H. Goldman, *Saul Bellow's Moral Vision: A Critical Study of the Jewish Experience*, Irvington, 1983, p. 157.
- (13) Bellow, p. 18.
- (14) Ibid. p. 135.
- (15) Ibid. p. 134.